

○ 病害虫防除法（カンキツ）

（ア） そうか病 *Elsinoe fawcetti*

（防除のねらい）

発病は降雨が多く湿度が高いと多くなる。感染時期は春葉では発芽期（芽長 0.5～1 cm）から伸長停止期まで、果実では落花期から梅雨末期までである。

薬剤防除は発芽期、落花期及び幼果期に重点を置くが、発生の多いときには梅雨時期の防除を増やす。

温州ミカン以外ではポンカンやタンカンでも発病がみられるので、発生園では定期的に防除する。

（耕種的・物理的防除法）

- （1）越冬病斑量を少なくするため、せん定時に発病葉をできるだけせん除する。
- （2）降雨後の雨滴の乾きを早くするため、園内の通風、採光をよくする。
- （3）新梢が遅伸びしないよう施肥管理に留意する。

（イ） かいよう病 *Xanthomonas campestris pv. citri*

（防除のねらい）

若い葉では気孔からの感染が主体であるが、葉が成熟し硬化してくると風傷からの感染が多くなるので、防風林や防風樹等の防風対策が最も重要である。また、罹病枝をせん除し、伝染源をできるだけ少なくする。

病原菌の密度が高くなると薬剤の効果が上がりにくいので、発芽前の防除に重点を置き、春先の菌密度を抑えることが大切である。薬剤防除は発芽直前～発芽期、開花直前、落花期～梅雨期、夏秋梢伸長期を基幹とする。また、台風後に多発するので、台風の襲来が予想される場合は3日～前日の予防散布を行う。

品種によって発生が著しく異なるため、甘夏、ポンカン、ブンタンなど発生が多い品種では適宜防除回数を増やす。

夏秋梢ではミカンハモグリガの食入痕からの発生が多く、翌年の伝染源となるのでミカンハモグリガの防除を徹底する。特に幼木、高接ぎ樹では重要である。

（耕種的・物理的防除法）

- （1）防風林や防風樹等の防風対策を徹底する。
- （2）せん定時に、夏秋梢の罹病枝をせん除し、第一次伝染源をできるだけ少なくする。
- （3）樹勢が強くなるように施肥管理に留意する。

（ウ） 黒点病 *Diaporthe citri*

（防除のねらい）

病原菌は枯枝上で越冬し伝染源となるので、枯れ枝のせん除を徹底し、せん定枝は土中に埋めるか、園外へ持ち出して処分する。果実では落花期直後から11月頃まで感染するが、主な感染時期は梅雨期と8月下旬～10月である。

薬剤防除は5月中旬～7月上旬、8月下旬～9月上旬に実施するが、降雨条件によって散布時期、回数を判断する。

（耕種的・物理的防除法）

- （1）枯枝のせん除を徹底し、せん定枝は土中に埋めるか、園外へ持ち出して処分する。
- （2）降雨後の雨滴の乾きを早くするため、園内の通風、採光をよくする。

（エ） 黄斑病 *Mycosphaerella horii*

（防除のねらい）

着果過多、肥料不足、病害虫の被害等で樹勢が低下した場合に発病しやすいので、樹勢の維持に努める。

空気伝染性の病害で発生は8月上旬頃からみられ、翌年の1月頃まで増加する。薬剤散布は感染の多い5～6月を重点に通常2回行うが、例年多発する園では7月に更に1回行う。

（耕種的・物理的防除法）

樹勢が低下した樹に発病しやすいので、栽培管理を適正に行う。

(オ) にせ黄斑病 *Sporobolomyces roseus*, *Aureobasidium pullulans*

(防除のねらい)

雨媒伝染の病害で落花期の降雨が多いと多発する。

発生園では葉中の銅、マンガン、亜鉛などの含有量の少ない樹に多く発生する傾向がある。そのため、これらの微量要素が欠乏しないよう肥培管理に留意する。

(耕種的・物理的防除法)

葉中の銅、マンガン、亜鉛などの含量の少ない園に多く発生する傾向があり、肥培管理に留意する。

(カ) そばかす病 *Mycosphaerella pinodes*

(防除のねらい)

マメ科植物に発生する褐紋病菌によって発生するもので、カンキツ園に近接してエンドウ畑がある場合に発生が多い。薬剤散布は果実を重点に落花期から梅雨期に2～3回行うが、ポンカンでは更に春梢の発芽伸長期に1～2回行う。春葉の病斑から果実へ二次伝染はしないが、新葉に感染すると落葉する場合があるので、多発園では発芽伸長期の防除も必要である。

(耕種的・物理的防除法)

(1) エンドウの茎葉は、カンキツ園の敷草として使用しない。

(2) カンキツ園周辺にエンドウが多く栽培されている所では防除を徹底し、収穫後のエンドウの茎葉は処分する。

(キ) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

(防除のねらい)

病原菌は、幼果の表面に付着して腐敗した花弁に密生し、果面に傷を付ける。

薬剤散布は、開花期～落花期に重点的に行うが、降雨の多い年は幼果期にも行う。なお、同一系統薬剤による連用は薬剤耐性菌が出やすいので、作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(耕種的・物理的防除法)

(1) 菌は多湿条件下で急速に増殖するので、園内の通風や採光をよくする。

(2) 樹をゆするなどして花弁を落とす。

(ク) 炭疽病(さび果病) *Colletotrichum gloeosporioides*

(防除のねらい)

甘夏、ブンタン、レモンなどの中晩柑類に発生する。雨媒伝染で伝染源は黒点病と同じく枯れ枝であり、特に、枯死した果梗枝は重要な伝染源となる。樹勢が低下した樹に多く発生する。また、台風や潮風害などで落葉すると枯枝が増加し、多発する傾向にある。

発病は樹上の果実や貯蔵果実ともに12月以降にみられ、主な感染時期は9～10月であることから、感染時期前の8月中～下旬の薬剤散布が有効である。

(耕種的・物理的防除法)

枯枝のせん除、特に、枯死した果梗枝のせん除を徹底する。

(ケ) 褐色腐敗病 *Phytophthora citrophthora*

(防除のねらい)

病原菌は土壌中に生存し、降雨による土壌の果実への跳ね上がりにより感染し発病する。発生が突発的であり、急激に進展するので早期発見による初期防除が最も重要である。

8～10月に長雨が続く場合や、その時期のスプリンクラー灌水により発生することが多い。

(耕種的・物理的防除法)

(1) 土壌が過湿にならないよう排水対策を行う。また下枝をせん除し、通風をよくする。

(2) 果実への土壌の跳ね上がりを防ぐため、果実の吊り上げ、敷きわら、マルチシート設置及び草生栽培をする。

(コ) 赤衣病 *Corticium salmonicolor*

(防除のねらい)

大島、熊毛地域のポンカン、タンカンを中心に発生がみられるが、県本土でも一部で発生がみられる。大島地域では、発生は4月下旬頃からみられ9～11月に最も多くなる。主な感染時期は5～6月の梅雨期であるため、この時期に薬剤散布を2～3回行う。また、罹病枝の除去は防除効果が大きい。

(耕種的・物理的防除法)

病患部（菌そう発生部）だけでなく、健全部の一部までせん除し、せん除した枝は処分する。

(サ) 貯蔵病害

青かび病	<i>Penicillium italicum</i> 、	緑かび病	<i>Penicillium digitatum</i>
軸腐病	<i>Diaporthe citri</i> 、	黒腐病	<i>Alternaria citri</i>
黒斑病	<i>Phoma citricarpa var. mikan</i>	灰色かび病	<i>Botrytis cinerea</i>

(防除のねらい)

樹上で感染し、収穫後貯蔵庫内あるいは輸送中に果実が腐敗するため、収穫前の薬剤防除は必ず実施する。収穫は果実を傷つけないように注意し、貯蔵庫内での取扱いも丁寧に行う。ベンゾイミダゾール系薬剤に対する耐性菌が発生しているため薬剤の選択に注意する。

黒点病と同じ菌が軸腐病を起こすため、軸腐病の発生が多い園では生育期の黒点病防除を徹底する。

(耕種的・物理的防除法)

- (1) 収穫果実の予措は、重量の3～5%が減ずる程度を目安に行う。
- (2) 品種や貯蔵期間等に適した温・湿度に保ち、腐敗果は見つけしだい除去し、貯蔵庫内での伝染を防ぐ。

(シ) カンキツグリーニング病 *Liberobacter asiaticum*

(防除のねらい)

病原菌は篩部局在性の細菌である。伝染方法は、接ぎ木伝染及びミカンキジラミによる虫媒伝染である。罹病樹は、要素欠乏症と酷似した症状を葉に呈し、感染初期は一部の枝葉に症状や枯れが生じ、末期になると枝が枯れ込み、ついには樹が枯死する。

(主な防除対策)

- (1) 発生地域から苗木や穂木を持ち出さない。
- (2) 感染樹は伐採、改植する。
- (3) ミカンキジラミを防除する。
- (4) 発生地域では高接ぎを自粛する。

(ス) 汚れ果症（輪状果面汚損症）

(防除のねらい)

不知火の果実赤道から果頂部を中心に黒点様症状が認められ、果皮が緑色の時には気付きにくく、着色が進むにつれて目立ち、外観を損なう。発症原因はまだ不明だが、幼果期～果実肥大期の薬剤防除で発症を軽減できる。

(セ) ウイルス病・ウイロイド

病名	病原	被害	伝染経路	主な対策
ステムピットティング病	カンキツトリステザウイルス (CTV)のステムピットティング系で強毒系と弱毒系がある	篩部組織の細胞を壊死させるので、木部にピットティング(くぼみ・溝)が生じる。その結果、樹の衰弱、果実の小玉果が見られる。文旦類及びイヨカンなどは弱く、温州ミカン、ボンカンなどは強い。	接ぎ木 虫媒:ミカンクロアブラムシ ワタアブラムシ	(1) 無毒母樹の育成(弱毒ウイルス樹の確保) (2) 樹勢維持 (3) アブラムシ防除 (4) 重症樹の伐採、改植
温州萎縮病	温州萎縮ウイルス(SDV)	春枝に舟型葉、さじ型葉、小葉、節間短縮を呈し、樹全体が萎縮する。萎縮程度は早生系統で大きい。	接ぎ木 土壌:SDVの媒介者は不明であるが、土壌伝染が確認されている。また、防風樹のサンゴジユにも感染し、伝染源となる。	(1) 無毒母樹の育成 (2) 地下部の蔓延を防止(溝を掘る、遮蔽物を入れる) (3) 発病樹の伐採、改植(ただし、SDV発生園では、カンキツ類は植栽しない) (4) 健全な穂木の利用
カンキツモザイク病	カンキツモザイクウイルス(CiMV)	果実が着色不良(モザイク)となる。発病程度は同一の樹でも、年次変動が大きい。		
その他近縁種	ナツカン萎縮ウイルス ネーブル斑病モザイクウイルス	ナツミカンの春葉に葉脈透化や波うち症状を示す。 ネーブルオレンジの葉に退緑斑点、退緑斑紋を示す。		
接ぎ木部異常病	アップルステムグルーピングウイルス(ASGV) (旧カンキツタリーフウイルス(CTLV))	カラタチ台カンキツの接ぎ木部に界層ができ、樹勢が衰弱する。また接ぎ木部が肥大し、台負け症状となることもある。	接ぎ木	(1) 無毒母樹の育成 (2) 発病樹の伐採・改植 (3) 根接ぎ(ユズ等) (4) 健全な穂木の利用
エクソコーティス病	カンキツエクソコーティスウイロイド(CEVd)	カラタチ台木部に、はく皮症状を呈し、カンキツを衰弱させる。	接ぎ木 接触:ナイフやハサミの切口から汁液伝染	(1) 無毒母樹の育成 (2) 発病樹の伐採、改植

(ソ) ミカンハダニ
(防除のねらい)

1年中いつでも多発する可能性がある。多発しやすい時期は5～6月、梅雨明け及び9～10月で、暖冬の3月も注意が必要である。着色前に加害されると果実の赤色の発現が悪く、商品価値を低下させるので注意する。防除は雌成虫が1葉当たり0.5～1.0頭(寄生葉率で30～40%程度)を目安にし、散布むらがないよう入念に散布する。

薬剤抵抗性が発達しやすい害虫の一つであり、露地栽培ではマシン油乳剤を、施設栽培では生物農薬を上手に使用して化学合成殺ダニ剤の使用頻度を減らす。

(タ) サビダニ類

(防除のねらい)

被害果実の外観は梅雨期では象皮状、夏季では黒褐色、秋季では赤褐色を呈するので、これらを基に発生時期を特定できる。ミカンサビダニはジマンダイセン抵抗性が顕在化している。さらに、リュウキュウミカンサビダニは、県内ほぼ全域で発生が確認されており、サビダニ類独自の防除を考慮する必要がある。

ミカンサビダニは梅雨明けの防除を基本とし、通常はこの1回の防除で十分である。リュウキュウミカンサビダニの発生が前年の秋季に多かった園では、春季の増殖抑制のために5月に防除する。8月中旬頃から園内を見回り、被害果が散見されたら秋季に多発する恐れがあるので、急いで2回目の防除を実施する。薬剤はミカンハダニとサビダニ類の両方に農薬登録のある効果の高い薬剤を選ぶと省力的である。

(チ) チャノホコリダニ

(防除のねらい)

年間の発生回数は不明であるが、露地、施設栽培ともに新梢や果実に被害が発生する。露地栽培では落弁期から7月の防除に重点を置き、多発園ではこの期間に2回防除する。施設栽培では落弁直後に1回目の防除を行い、常発園ではその後も1～2回防除する。

(ツ) チャノキイロアザミウマ

(防除のねらい)

6～7月と9～10月の発生が特に多い。春から夏にかけて降雨の少ない年に被害が多発する傾向がある。低密度でも被害は大きく、加害期間が長期にわたるので、発生に応じて薬剤を数回散布する。被害は甘夏や不知火では主に果梗部、タンカンでは主に果頂部、温州ミカンでは果梗部と果頂部に発生するなど、品種によって被害の様相が異なるので適切な防除体系を組む。

(耕種的防除法)

イヌマキは重要な発生源になるので、新梢がだらだらと発生しないように管理する。

(物理的防除法)

光反射シートをカンキツ園に設置すると被害を軽減でき、薬剤散布の回数低減につながる。

(テ) ミカンキイロアザミウマ

(防除のねらい)

平成8年に北薩地域のハウスミカンで発生が確認された。主に果実の着色期以降にハウス内に侵入して加害する。本種は黄色及び青色に誘引されるので、粘着トラップを用いて発生の有無を調査し、発生を確認した場合は直ちに防除する。また、チャノキイロアザミウマとは薬剤に対する感受性が異なるので注意する。

近年、ネギアザミウマ、ハナアザミウマ類及びクロトンアザミウマによる被害が増加しているので十分注意する。

(耕種的・物理的防除法)

施設栽培の場合、サイドの開口部にネットを設置すると侵入を減らすことができる。また、雑草等で増殖するので、果実の着色が始まる前に周辺を除草し、発生源を少なくする。

(ト) ネギアザミウマ

(防除のねらい)

平成10年に肝属地域のハウスミカンで被害が初めて確認された。加害時期は着色前から着色期で、ミカンハダニの被害に類似した白いカスリ状の被害痕が発生する。施設栽培では被害が多発することがあり、特にサイドビニルの開放後は注意する。

(耕種的・物理的防除法)

発生源は周辺の植物で、特にラッキョウやネギ、ノビルなどが周囲に栽培されている園では被害が多発する傾向がある。これらを含めて周辺の雑草管理を徹底する。

(ナ) ヤノネカイガラムシ

(防除のねらい)

一部の園地を除いて発生は少ない。これは1980年に中国から導入された2種のコバチが定着しているため、これらの温存を図る。生育期の薬剤散布は第1世代期又は秋季に発生が多く果実の被害が予想される場合に限定し、天敵類に影響の少ないIGR剤又はマシン油乳剤97%を活用する。

(ニ) アカマルカイガラムシ

(防除のねらい)

アカマルカイガラムシは9月頃まで発生に気付かず、秋季に被害が急増することが多い。冬季のマシン油乳剤は防除効果が高いため必ず散布する。特に果実で被害がみられた園では、翌年の発生を減らすために重要である。

(ヌ) ロウムシ類

(防除のねらい)

ルビーロウムシとツノロウムシの発生がみられる。特にルビーロウムシの発生が普遍的であるが、有力天敵ルビーアカヤドリコバチにより発生は低密度に抑制されているので、薬剤散布は激発部分にとどめる。

(ネ) イセリヤカイガラムシ

(防除のねらい)

防除は有力天敵ベダリアテントウの利用を主体とする。薬剤散布はイセリヤカイガラムシが激発し、園内で天敵の発生が見られない場合に限り、ロウムシ類に準じて局所的に行う。

(ノ) コナカイガラムシ類

(防除のねらい)

ミカンヒメコナカイガラムシとフジコナカイガラムシが主体であるが、一部の地域でミカンコナカイガラムシの発生も確認されている。数種のコバチ類やテントウムシ類など有力な天敵が存在するので、越冬世代幼虫の発生が高密度でない限り薬剤散布は控え、天敵の活用を図る。

コナカイガラムシ類は日当たりの悪い場所を好み、隙間に入り込む習性があるので、薬液が十分かかるように丁寧に散布する。第1世代を対象にした防除が効果的であるので、他のカイガラムシ類の天敵類に影響が少ない剤を選択する。

(ハ) アブラムシ類

(防除のねらい)

20種類以上のアブラムシ類が寄生するが、防除上は新梢に寄生するミカンクロアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ及びワタアブラムシの3種が重要である。

発生は年により、園によりまちまちであるので、発生状況をよく見極めて防除要否を決める。

ミカンクロアブラムシは果梗部に寄生することがあり、ユキヤナギアブラムシでは巻葉後の散布は効果が低下するので、早めの防除が望ましい。

(ヒ) カメムシ類

(防除のねらい)

病害虫防除法（果樹共通）参照

(フ) ヒメヨコバイ類

(防除のねらい)

カンキツ園に生息するヒメヨコバイ類は、ゴボウノミドリヒメヨコバイをはじめ 10 余種に及ぶが、ほとんどはカンキツ園外から飛来するものと思われる。カンキツ園では果実が着色し始める 10 月上旬から生息数が多くなる。

波状的に集中飛来する害虫で防除は難しいが、少発園では 2～3 分着色期に 1 回、中発園では着色初期と 5 分着色期の 2 回、多発園では着色 2 週間前から 3 回を目安に防除する。黄色トラップで発生消長を把握できるので、集中飛来時期を狙って薬剤を散布すると効果的である。

(耕種的・物理的防除法)

園内の下草はヒメヨコバイ類の生息場所となるので極力除草する。

(ヘ) ゴマダラカミキリ

(防除のねらい)

成虫は 5 月下旬から発生し、6 月上旬～中旬が羽化盛期になる。成虫は緑枝を食害し、羽化・脱出 2 週間後から産卵を開始する。産卵は 6 月中旬頃から始まり 7 月上旬が盛期で、8 月まで続く。樹勢が低下した樹では集中的に産卵される。

生物的防除を実施しない園では成虫の捕殺や、適用薬剤の散布により密度低下を図りながら、幼虫の虫糞がわずかに見え始める食入初期と、さらに多発園では 30 日後に登録のある農薬を主幹から株元に散布すると省力的である。

(耕種的防除法)

草生園は被害を受けやすいので、株元を除草する。

(物理的防除法)

(1) 幼木の主幹地際部を物理的に遮断すると、成虫の産卵を防止できる（ストックカバー法）。

(2) 朝夕、成虫の活動がにぶい時間帯に捕殺する。卵の圧殺・幼虫の刺殺の効果は確実である。

使用時期	資材名	使用方法及び注意事項
成虫羽化前～ 産卵終期まで	タイベック（ハードタイプ） 肥料袋、土嚢袋など	主幹下部に巻き付け、接合部をホチキス止めし、下部を 2～3 cm 程度土に埋め込む。

(ホ) 訪花害虫

(防除のねらい)

コアオハナムグリとケシキスイ類による被害が大きい。防除時期は開花期の短期間であり、晴天が続くと虫が活発に活動し被害が増加する。地域ぐるみの一斉防除が効果的である。

発生が少ない場合は開花盛期に 1 回、多い場合は開花初期と盛期に 2 回防除する。受粉を必要とする品種では開花盛期以降に防除する。

(耕種的・物理的防除法)

光反射シートを設置すると、訪花害虫の飛来を防止できる。

(マ) ミカンハモグリガ

(防除のねらい)

防除の主体は夏枝であり、夏枝をだらだらと発生させないような肥培管理が最も大切である。成虫は日中葉裏に潜んでいるので、樹全体の防除が効果的である。

I GR 剤、カーバメート剤、マクロライド剤及びネオニコチノイド剤は防除効果が高いので、これらをローテーション散布する。

(ミ) ハマキムシ類

(防除のねらい)

主なものはチャノコカクモンハマキとミカンマルハキバガ（ミカンコガ）である。

防除は若葉の食害防止と果実への食入防止につながる。特に、夏秋梢伸長期の防除は果実への食害防止の面から重要である。

(ム) クワゴマダラヒトリ

(防除のねらい)

10年位の周期で大発生する。発生は局地的であるが、時に突発的に発生して大きな被害を出すことがある。秋の若令幼虫が果実を、春の越冬幼虫が新梢及び花蕾を食害するが、後者の被害が最もひどい。特に裏年には壊滅的な被害を受ける場合がある。

薬剤防除時期は、春と秋の幼虫発生期の2回である。

(耕種的・物理的防除法)

産卵植物（カラスザンショウ、アカメガシワやウラジロエノキ等）に限られるので、カンキツ園周辺にそれらの樹木がある場合は伐採する。

(メ) アゲハ類

(防除のねらい)

苗木、若木、高接樹では被害が大きいため、若令幼虫の防除に重点を置く。

(モ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

葉や果実を食害する雑食性の害虫である。特に、ハウスミカンでは秋季にハウス内の雑草が多い場合、ビニル被覆後に多発することがある。

下草がなくなると、樹上に上がり加害するので、下草で発生を認めても慌てて除草しない。キャベツ等のおとり餌を使うと効率的に捕殺できる。老齢幼虫は薬剤に対して感受性が低いので、ハウス内の密度が高まらないよう初期防除を徹底する。

(ヤ) カネタタキ

(防除のねらい)

毎年発生が認められるが被害を与えることは少ない。したがって、薬剤散布は果実での被害を確認した時点で早急に行えばよい。

(耕種的・物理的防除法)

防風垣のイヌマキが繁茂しているとそこが繁殖場所になるので、繁茂しないよう管理する。

(ユ) ウスカワマイマイ

(防除のねらい)

梅雨期に幼貝の発生が多いと果実の被害が発生する。また、秋雨が長く降り続く時は警戒を要する。

(ヨ) ワタミヒゲナガゾウムシ

(防除のねらい)

施設栽培で被害が見られ、幼虫や蛹は樹上で腐敗乾燥した果実や落果に寄生している。加害期間は幼果期～収穫期までと長い。幼果では主にごく部を加害し、被害果は黄変、落果する。成熟果では成虫が果皮及び果肉を加害し、産卵した場合は幼虫が果肉を加害する。

果実で成虫の寄生を認めた場合は早急に防除する。

(耕種的・物理的防除法)

樹上で腐敗乾燥した果実や落果を園外に持ち出し処分する。

(ラ) ミカンナガタマムシ

(防除のねらい)

寄主植物はカンキツのみで、樹勢が低下した老木で発生が多い。奄美諸島及び沖縄では本種とアレスマカンナガタマムシの2種の発生が確認されている。

成虫は年1回発生（6～7月が多い）し、硬化した葉の葉縁部にノコギリ歯状の特徴的な食害痕を残すので発生の確認は容易である。幼虫は木質部を食害し、樹内で越冬する。

ミカン及びナツミカン以外は登録農薬がないので耕種的防除に努める。

(耕種的・物理的防除法)

(1) 樹勢を低下させないよう適正な着果、肥培管理に努める。

(2) 成虫の羽化脱出孔が認められる枝は切除し、園外に持ち出して処分する。

(リ) ミカンキジラミ

(防除のねらい)

カンキツグリーンング病を伝搬するキジラミは、ミカンキジラミ及びトガリキジラミの2種で、南西諸島にはミカンキジラミが分布している。

カンキツグリーンング病は主にキジラミ成虫が伝搬する。罹病樹を吸汁して発育した幼虫は、4～5齢で伝搬性を持つようになる。経卵伝染はしない。

本虫はミカン科の植物でしか増殖できず、特に生垣のゲッキツでは刈り込みが年間に数回行われ新梢の発生が多いため、本虫の発生が多い。産卵は新梢に限られ、1～4齢幼虫は新梢でしか発育できないため、新梢発生期の防除が重要である。

カンキツグリーンング病に対し、現段階では罹病樹の伐採以外に有効な防除法がなく、媒介昆虫であるミカンキジラミの防除はカンキツ類における本病の蔓延を防止する上で最も重要である。